施政者を中心として、厚い信仰が注がれて来たことに違いありません。

宮内町史　地誌紀行編七四〇ページには、地御前五月五日祭（厳島図会巻之四）という文字が見られ、往時の賑わいが見事に写し出されています。

厳島神社社務所の方が「御陵衣祭」に関して、いつ頃から行われていたの問いに対し嘉禎二年（一二三六年）三月の時点で収蔵されていた装束目録の中に、すでに「流鏑馬装束」として「水牛」と「笠」（四つ）と「泥障」等の記載が見られます。（この年の十月十三日に改築された新しい社に遷宮が行われているとのこと。清盛の造営以来六十八年を経て、痛み荒れていたのではないだろうかと考えられます。）

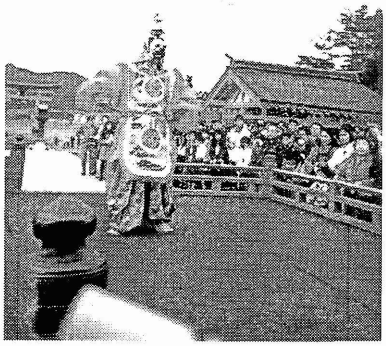
―ご回答　引用の七―

その他にも、大内義隆のころ「外宮御神事」の「師子舞」（獅子舞）が端午の日に行われていたことや、元和年間（一六一五～一六二四年）に、地御前での流鏑馬について明確に記されていると記載していただきました。

七、舞楽「陵王」と御陵衣祭について

「厳島神社　年中行事の主なもの」を、厳島神社　社務所にて拝受し、年中を通してそれぞれのお祭りに於いて、上演される舞楽等の一覧表を見せていただきますと、旧暦五月五日　摂社地御前神社祭　午後二時　祭典後に、舞楽とあり、曲目は一定していない。と記されています。また、流鏑馬（やぶさめ）が行われる。と書かれています。

次に掲げる写真は、数年前の桃花祭の折私が写した陵王の舞ですが、大勢の拝観者が舞台を取り囲んでいて、とても写すのは無理だと思っていたところ、前にいた二～三人のカメラマンが動いたため、運よくシャッターをきることができた一枚です。



――舞楽「陵王」――

この時の、陵王の舞は、美しい雅楽の調べと共に、優雅であり、そして神秘的で何とも厳かな動きと躍動感に、魅了され強いインパクトに、圧倒されるような思いがいたしました。

舞楽に関わることですが、廿日市町史には、御陵衣祭に上演されるのは「陵王」「納曽利」と記されています。

しかし、「地御前神社祭　舞楽　曲目は一定していない。」と、年中行事に記されているのを見て、如何したことなのかと、お尋ねしたところ、多分その年に「陵王」「納曽利」が上演されたので、町史の方には書かれたのだろうということでした。

その時の舞手の方によって、上演される曲目が決まるのだということがわかりました。

従って「御陵衣祭」が「陵王」の衣を着る舞楽の祭典ではないことは、左の通りです。

「棚守房顕が、その子、長松丸に宛てた当社の年中行事の執行責任権限を伝えた文章（「野坂文書」）には地御前神社祭の舞楽を「龍王」と書いております。「陵王」の意ですが、この点からも「御陵衣祭」が陵王の衣を着る舞楽ではない事が…。」とあります。

八、おわりに

美しい瀬戸内の沿岸部に育った人々は、幼い頃から厳島への信仰や年中行事等への関わりをもって、暮らして来たことと思われます。

古老から伝え聞く、市杵島姫の伝説等も、厳島に対する敬意や憧れのようなものをもって耳を傾けたに違いありません。

いつの頃から「御陵衣」の字をあてるようになったのかは判然とはしないけれど、「御霊会」の字を憚ったか嫌ってなのか「御陵衣」と書き変えた可能性もあるとのことです。

いづれにせ御陵衣祭がこのように長く続き得たのは、それを支え続けた地元の人々の純朴で崇高な信仰があったこそと強調されています。御指導いただいた佐伯様等社務所の方々に、心から厚く感謝申しあげます。

先人達の優れた文化遺産を尊び、伝統的行事等を、次の世代へ継承していくことは、現在の私達の大きな使命だと思っています。

（終わりになり恐縮ですが、前号の「氷川静優」小学校長名が違っており失礼をおわびします。）